

ローマ・カトリック教国の 白い共産主義

渡 辺 好 章

目 次

1. イントロダクション
2. 共産主義は疑似宗教
3. 最近のイタリア経済状勢
4. イタリア共産主義隆盛の沿革
5. カトリシズムと Kommunismus は和合できるか
6. カトリシズムに Kommunismus を吸引する要素があるのか
7. カトリシズムは Kommunismus に屈服するものか

1. イントロダクション

そもそも、この小論文の発端となった発想は、去る五月一日、イタリアはミラノのドゥオウモ広場において起来した。

午前十時、南欧イタリアの空は青く澄みわたり、薫風を心地よく頬に受け、間もなく目前に展開するであろうイタリア最大のゴシック風大寺院と大理石のモザイク模様の美しいドゥオウモ広場の壮麗な光景を想い浮かべながら、千古の歴史に黒光りする石畳の小路を急いだ。

予想に反し、そこで目のあたりに見たシーンは、あたかも戦争でも勃発したかと戸惑うばかり、異常に興奮した大群集が銅像や街燈にまで鈴生りにたかり、ボリュームをいっばいに上げたラウドスピーカーから放出されるエクセントリックな語尾上りのアジ演説の口調とプラカードを先頭に林立する赤旗の隊列が広場に溢れ、無数の鳩は狂気して飛び廻っていた。熱狂のルツボと化した

イタリア共産党メーデー集会の真直中に突入したわけである。

雑踏と怒号をさげドゥオウモ内に避難すると、そこには中世の静寂が漂う別世界があった。しっとりと薄暗い巨大な空間に立ち、ステンドグラスが描き出す荘重な神と人間の物語に包囲され、ロウソクの赤い小さな光に照らされ神秘的な表情で語りかけてくる諸聖者を眺めていると、背筋を突き上がる戦慄を覚えた。そして、厚い石壁を通して、かすかにこだまして聞こえる外部の罵声に注意を向けたとき、こんな思惟が湧き起ってきた。

ローマカトリックの総本山、イタリアにおいて共産主義がこのように隆盛になってきた現象は面白い。いうなればカトリック教国に台頭する二十世紀の宗教改革である。一体、この事態は今後いかに展開してゆくのだろうか。カトリシズムと Kommunismus は和合できるものなのだろうか。カトリシズムと Kommunismus の間に何か共通する要素があるのだろうか。カトリシズムは Kommunismus に最終的に屈服するのだろうか。

この問題を若干掘り下げて研究してみることは、過去数年来続けている東・西宗教観の比較分析を通じ、日本人と欧米人の民族的社会均衡原理の相違を明らかにし、それが両者の企業行動や政治活動にいかんにか反映しているかを確かめてみようとする研究⁽¹⁾と軌を一にするところで、その上、かねてより懸案となっていたカトリシズムとプロテスタンチズムを対比させて考察することにより、南北ヨーロッパの本質的相違を明確にし、キリスト教文化圏内の二大潮流を区別して認識できると考えた。

それでは以下に、共産主義は一種の宗教であることを限定したのちに、最近のイタリア経済情勢、さらに同地における共産党勢力の発展を概観したうえで、前述の三つの設問について検討してみよう。

2. 共産主義は疑似宗教

マルキシズムの唯物弁証法をもってすれば、宗教は社会生活、経済生活の人

(1) 渡辺好章、「宗教史にみる日本的均衡のメカニズム」城西経済学会誌、9巻3号、10巻1号、2号、3号

間意識における幻想的反映である。それは、人間の現実生活の苦痛や社会生活の矛盾に対する唯一の慰安として発生した。故に、宗教は民衆の現実の苦痛を一時的に和げるための麻酔剤であると言明する「宗教阿片説」が成立する。

しかし、相沢久の研究を援用すれば、マルキシズム運動に宗教的なメシア思想が多分に含まれていることは、バルトやニーバのごとき神学者のみならず、ドウソンのごとき歴史学者やベルジャエフのごとき哲学者までも明瞭に説いている。すなわち、「カールマルクスの唯物史観のもっている極めて合理的な外観の背後には、黙示録的な幻想の火が燃えている。ドウソン」「マルクスによれば、プロレタリアートはメシアであり、他の一切の階級が搾取の原罪に汚されているにもかかわらず、それから免除されており、それは未来の人類の最も道徳的なタイプとなるであろうというのである。ベルジャエフ」

更に、政治学者ラスキはロシア革命と原始キリスト教との共通点を指摘して、「ロシア革命にたいする信念は、その信奉者たちにたいして、ちょうどキリスト教が初代信徒たちにたいしてもったと同じような、一種の魔法的な力をもっている。これこそ、人間内心の最高なものに呼びかけるものである。自己という祭壇への捧げものや個人的利益を増すものとしてだけでなく、さらに共同の利益に寄与するものとしての、最高完成に呼びかけるものである。」と言及している。

宗教を人文社会学的見地から研究する宗教地理学においても共産主義を宗教現象とみなしている。その分野の大家、D. E. ソーファーは『宗教地理学』⁽³⁾にて、共産主義は経験的に証明できない普遍的哲学（宗教）思想を伝達し、人間の価値観や行為に作用し、その組織や土地に特別な影響を及ぼす意味において、疑似宗教とよぶことができる。この唯物論者たちの宗教は、恒例のメーデー祭典のような儀式がある。教祖的カリスマが存在し、神聖で侵すことのできない聖典をもっている。実際に礼拝されているか否かは別として、職場や家庭の内にカリスマ的人物の写眞が祭ってある。伝統的キリスト教社会の中で発生

(2) 相沢久、現代国家における宗教と政治、勁草書房、1973年2版、p.44-5

(3) D. E. ソーファー著、徳久・久保田・生野訳、宗教地理学、大明堂、昭46、p.176-7

した共産主義思想の根底には、終末論的神話を受け継ぎ、労働と犠牲の思想に禁欲的要素が窺われ、その好戦的排他的態度はキリスト教世界の善悪二元論に立脚するものである、といった指摘をおこなっている。

山本七平の見解によれば、⁽⁴⁾マルクス主義の基本は、旧約聖書の世界観であって、インド的なものではない。一言でいえば、セム的である。その歴史は一方向に進み、人間の意志で左右できない必然性をもって、資本主義は終末を迎え、革命という審判を受けるのである。一方、古代ローマには「歴史は一方向に進む」といった考え方は皆無であった。この点、かれらはインド・アリアン型の典型で、キリスト教以外にもエジプトのイーシス教、イランのミトラス教など、何でもその空間にとり入れてしまったのである。

こうしてみると、本来、セム人の宗教、ユダヤ教から発したキリスト教が、迫害に次ぐ迫害の末、紀元313年の「ミラノの勅令」の発布とコンスタンティヌスの改宗によって国教となって以来、ローマカトリックとして優れてイタリア化され定着した。それが、約千七百年後の今日、セム的疑似宗教、共産主義と直面し、相克する関係に立ちいたったのである。正しくこれは、イタリアに発生した二十世紀の宗教改革闘争の観がある。

3. 最近のイタリア経済状勢

いつの時代、いかなる国においても、大衆が新しい宗教ないしイデオロギーを求望する動機の根底には、現状の体制や経済生活に対するフラストレーションが存在する。そこで、この宗教闘争の成り行きを占うまえに、先ず現在イタリアにおけるフラストレーションの強度、震源地およびその方向を調べておく必要があるだろう。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

フランスのイタリア経済専門家、フィリップ ヴィニョーは「イタリア砂漠」の言葉をもって、その経済活動の停滞と社会秩序の荒廃を表現した。事

(4) 山本七平、存亡の条件、ダイヤモンド社、昭50、2版、p.152-5

(5) 中村忠一、イギリス病・イタリア病・日本病、東洋経済新聞社、昭51、p.119-55

(6) ARCレポート、イタリア、世界経済情報サービス(ワイス)、昭48、A01-14.

実、今回の訪問地、ミラノ、ベニス、フィレンツェ、ローマの全市において、険悪な表情をした薄穢い若者がゴロゴロ溢れ、街は汚れ、噴水の水もかれ、ひったくりやスリが横行し、チップの強要やつり銭サギは日常茶飯事となっていた。

こうした事態の背後にある経済事情を統計数字に求めるならば、過去12年間にみるイタリアの年間平均投資成長率は3.6%と、フランスの8%、西ドイツの4.5%、イギリスの3.9%にも劣る最低である。これは即ち、経済活動の停滞による構造的な失業となって現われ、これまた同期間平均で、イタリアの3.3%は、西ドイツの0.8%、フランスの1.8%、イギリスの2.4%を上回る失業率となっている。因みに、1975年9月には7%を陵駕する120万人の失業者が記録されている。一方、インフレによる物価高騰は物凄く1970年を100とすると1975年で175に達し、とりわけ1975年一年間をみれば、15.3%も物価が上昇している。その反作用として、リラの購売力はこの一年間で約三分の二に縮減した。1976年2～5月の4か月間にその上また30%下落したそうで、ヨーロッパ諸国の銀行で一万リラ以上の換金を禁止していたのが実状である。病めるイタリア経済の命脈は海外借入金によって保たれ、1972～73年の2年間に105億ドル、金利の支払いだけで年間7億ドルに達した。その後、石油価格の高騰と食料品輸入の増大から、イタリアの外貨事情はさらに悪化し、74年4月の時点では8,110億リラの貿易赤字を記録している。こうしたイタリア経済の破産対策として、「ケインズ経済理論はあまり頼りにならない救命ブイのようなもので、現在のイタリアが真に必要なものは、微に入り細にわたった経済分析ではなく、ひとりのメッテルニヒではないだろうか。」とする中村忠一の診断は示唆するものが多い。

イタリアの Kommunismus 旋風の起点は、中南部農業地帯に発したもので、その後北上し目下のところ北部イタリア工業地域により大きな台風の目を形成している。熱狂分子の急先鋒は青年男子で、その囲りに中高齢者と女性層の支持が集っている。現在の失業者120万人のうち、30万人は初めて雇用機会を求める若者たちで、その他かなりの数の婦人労働者が職を求めて狂奔しているからである。イタリアの雇用安全保障制度が不況下には逆に作用し、既就業組合員

の特権となって、同一職種同一賃金のイタリア（ヨーロッパ）で新卒若年労働者の就職難を一層きびしいものになっていることもある。一方、「雇用安全保障」にもかかわらず、深刻な経済上の理由から、私企業での人員整理が進行しており、1973年の一年間にフィアットで1万3千人が解雇となったほか、モンテフィブルやスニア・ビスコーサ社でもかなりの人員整理が断行されている。

このような、経済力の低下→構造的不況→人員整理→インフレの高騰と貨幣価値の相対的下落→貿易収支の赤字と外資借款→経済力の一層低下、とめぐる悪循環に対し、生活不安におびえる大衆の自衛手段として賃上要求ストや雇用安全保障契約および政府の失業対策改善のための実力行使がなされる。しかし、そうした行為は結果的に国家経済構造を疲弊させることを承知していないわけではないから、大衆のフラストレーションは経済構造の矛盾や特権階級の不平等に向けられて噴出してゆくのである。

経済構造面の最大矛盾は、国有化産業の過度集中化である。1963年の電力国営化に端を発する国有化は、その後、鉄鉱、化学、重電など基幹産業を無制限に合併し、鉱山およびアルミニウム産業が国営化された現在、次に繊維、衣料、観光事業、新聞雑誌等出版産業が狙われている。こうして、IRIやENIのようなイタリア経済を象徴する巨大企業グループが結成されていったのである。企業の国営集中化それ自体は弊害を直接もたらすものではないが、その当然の結果として発生する公権の過度集中、それを私物化した政治家・官僚・銀行家などの結託による金権政治の流す害毒が問題である。一例をあげれば、80%まで国有化されたイタリアの銀行の市中貸出し金利は、経済危機をたくみに悪用して、引き上げに続く引き上げをおこなっている。金権政治体質の悪性腫瘍とも言うべき「国営高利貸制度」は親方日の丸の国営企業の金利負担を過重にする一方、健全な民間設備投資意欲を著しく阻害していることはいうまでもない。

このようにしてイタリア経済を牛耳っている「政府地下組織」のボス達に対する反感もさることながら、大衆内部が分裂し対抗する動向が最近になって顕在化してきた。それは、イタリア国有企業労働者の給与は、民間企業のそれに

比べ、じつに93%も高くなっており、しかも国有企業に働く連中は、国家が破産しないかぎり解雇の心配がない。それなのに、その強大な組織と圧倒的政治力を乱用し、大衆の迷惑も顧みずストライキを繰り返し、しかも職場にあってはサボタージュなど勤労モラルの最低なのは国有企業労働者なのである。

マリオ デアリヨ教授は現代イタリア経済の構造を譬えて、「まるで瀬戸物屋に飛びこんできたブキッコな狂象である。かれらが下手に動こうものなら全てを破壊するかもしれない」と巧みに描写している。

4. イタリア共産主義隆盛の沿革

イタリア共産党は1921年社会党左派が分裂して誕生した。その後、ムッソリーニファシスト政権時代に非合法化され、代表的指導者グラムシらが逮捕され、崩壊状態にあった。1944年、モスクワから戻ったトリアッチ書記長の指導で再建され、45年にはキリスト教民主党などと連立内閣を組んだこともあるが、47年に社会党と共に閣外に去った。以後、北部工業地帯の勢力を背景に着々と勢力を伸ばし、58年に22.7%、63年に25.3%、68年に26.9%、72年に27.2%そして75年6月の選挙では不可能とされていた「三割のカベ」を突破して33.4%と大きく勢力を拡張し、与党第一党のキリスト教民主党の35.3%に肉迫するところとなった。現時点におけるイタリアの公称黨員数170万人は、フランスの50万、ポルトガルの10万、スペインの3万を桁違いに上廻るヨーロッパ最大の勢力となっている。

元来、共産党の強い地域はイタリア中部のトスカーナ、エミリア ロマーニャ、ウンブリアの三州で、この地方は戦前、典型的な小作農地帯で、皮肉なことに法王庁の領地として搾取され尽くした「ファシズム発生の地域」である。ところが、1975年の地方選挙でリグリア（首都ジェノバ）、ピエモンテ（同トリノ）、ロンバルディア（同ミラノ）の典型的な北部工業地帯で共産党が大躍進したのである。こうした大躍進の要因として、地域的勢力拡大の外に見逃せない趨勢として、婦人および若年層の支持がある。全国総有権者四千万人の内その52%が婦人票であるといわれる。過去婦人の大半は教区の神父や夫の意見に従っ

て投票し、その結果、婦人票の60%がキリスト教民主党に流れ、それが同党の政権を30年間支えてきたとされている。しかし、74年の離婚法成立が実証する如く、政治に目覚めた婦人の勢力はイタリア政局を左右するところとなった。加えて、選挙法改正で有権者の年齢が18歳まで引き下げられた結果、有権者数は550万人増加し、その60~70%の票が昨年の方選挙で共産党を中心とする左派に流れたと推測されている。

それでは、労働者、婦人、若者が支持するイタリア共産党の政策とはどんな内容か、簡潔に要点だけ列記してみよう：

基本路線・議会制民主主義のもとで暴力革命によらず合法的に政権に接近し、社会主義社会の建設を目指す。

プロレタリアート独裁の思想は既に放棄。

軍事及び安全保証・NATOにとどまり、東側のワルシャワ条約機構には加盟しない。

国際的緊張緩和路線を推進し、軍備は徐々に縮小してゆく。

経済運営・一部の機構整理を除き、産業国有化をこれ以上拡大しない。

土地の国有化も実施しない。

私企業の存続および利潤獲得活動を認める。

給与所得者に厳しい現行税制を改革し公平の原則を確立する。

対外的に保護主義的な経済政策はとらず、各国と協調してゆく。

宗教問題・国家は非宗教性を原則とするが、個人の宗教的信念ないし、教会の活動は自由とする。

政権構想・カトリック（キリスト教民主党）、社会主義（社会党）、共産党の三大勢力の「歴史的妥協」による連合政権を目標とし、当面の政治・経済危機を乗り切るため、ネオ・ファシストを除く各党の「挙国一致内閣」を提唱する。

国際路線・ソ連、中国の何れにも偏らず、独自の社会主義社会を建設する。

これが共産党の綱領かと目を疑いたくなるほどリベラルなものである。マルクス主義の精神に反するものだとクレムリンが批難するのも無理はない。

イタリア共産党中央委員アントニオ・ルッピの言明を引用すれば、「イタリア党は、グラムシ初代書記長、トリアッチ二代書記長以来、プロレタリア独裁が必要だといった者は一人もいない。初めから無いから、放棄もしない。三十年来、常に民主勢力と一貫して協力してきており、政権を担当することになっても、民主的コントロールに従う。われわれはあらゆる自由を保証する。わが党がソ連や東欧諸国と衝突しているのは、われわれがこの信念を曲げないためだ。」マルクス学者のみならず、一般人の目にも、これは正しくマルキシズムとは名ばかりのイデオロギーである。だから、ユーロ・コミュニズムないし、白い共産主義と呼ばれるのだろう。

5. カトリシズムとコミュニズムは和合できるか

現況が更に軟化し、白い共産党が増々白色の度合を強化してゆけば、あるいはカトリシズムとイタリア・コミュニズムの「歴史的妥協」は実現するかも知れない。

しかしながら、もし共産党が議会制民主主義のもとで合法的に政権を握り、その地歩を固めた時には、必ず本性を現わし、極端な統制経済路線をしくに違いないとする疑惑は未だ国の内外で濃厚である。国内世論調査の数字によれば、「共産党が政権をとったら、口約束をホゴにして独裁政治を敷くだろう」と考えるものが54%もあった。また、ユーロ・コミュニズムを攻撃して論議を呼んだ『全体主義のいざない』の著者、フランソワ・ルベルは、「西欧共産主義は“自由も公平も”と両手で花をさし出しているが、むしろそれは常にスターリン主義的で、独裁的だ。口先でいろいろ言っても、本質は変らない」と見ている。ウォール・ストリート・ジャーナル誌は去る九月の選挙前に、「イタリア共産党がNATOメンバーとしてとどまるとしても、アメリカがその存続を認めるかどうか定かでない」と社説の一節で述べている。そして先日、シュミット西独首相が「サンファン首脳会議の折、イタリアの新政権に共産党が入閣したら援助を停止することが、米、英、仏、西独の間で内密に決まった」と発言し、イタリアの反抗をかったことは記憶に新しい。

ともあれ、純粹な意味から、カトリシズムとコミュニズムは絶対に和合できない宿命にある。

去る五月、バチカンで開催された全国司教会議で採択された「クリスチャンであると同時にマルクス主義者であることはできない」とする不退転の宣言に現われている如く、ローマ・カトリックはあくまでも共産主義と対決する構でいる。投票に二日先立ちバチカンは、カトリック信者が共産党に投票を禁じた1949年政令は現在でも有効であり、共産党に投票した信者は破門され得ることを示唆している。ローマ市の法王代理であるウゴ・ペレッチ枢機卿はこの選挙を「神の都と神不在の都との戦い」と表現している。

言わばそれは、「改宗か死か」の一神教思想の対立である。前述の如く、両者はメシア思想の歴史観に立脚する点で同根であるが、唯物史観をとるか精神史観をとるかで、立場は決定的に相克する。その対立は論理的にいて、カトリックとプロテスタントのそれより峻厳である。何故ならば、キリスト教徒は絶対なる神の子として、共にキリストの教えに帰依するが、共産主義者は階級なき搾取なき魂なき集合体（国家）に奉仕するからである。

だから、白い共産主義が政権をとったなら、その覇権を確実にする政策を実施する段階で、党の命令に従うより神の啓示に忠実であろうとするキリスト教徒は、当然迫害を受けるに違いないとローマ教会は見ている。

このローマ教会の頑固な態度の裏には相応の理由がある。それは第二次世界大戦以後、東ヨーロッパブロック諸国で彼った迫害の傷跡がまだ生々しく残っているからである。⁽⁷⁾ユーゴスラヴィアでは、1946年ザグレブの大司教ステピナク師の逮捕に次ぐ処刑を第一矢に、401か所の司祭教区で司祭が追われ、聖職者で殺されたもの186名、死刑に処せられたもの32名、強制収容所に送られたもの85名、追放されたもの409名が記録されている。ハンガリアではミントセンチ枢機卿が、教育の「国有化」に反対し逮捕され無期懲役となった。チェコスロヴァキアでは、プラハの大司教ベラン師とその同志司教が追放ないし禁

(7) A. ラトレイユ, A. シグフリード, 仙石・波木訳, 国家と宗教, 岩波現代叢書, 1958年, p. 188-93

固され、宗教施設は接収され、カトリック新聞は発禁となり、代って骨抜きになった政府ご用の「カトリック教会」が創立された。その他、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、アルバニアでも同様な迫害を受け、ソ連においてもバルト海及びリトアニア地方では全滅の観があり、大量追放の処罰を受け~~て~~ている。全体として東欧諸国では、ローマ聖庁が明らかにした統計によれば、殺されたり投獄された聖職者は1万3千人となっている。

6. カトリシズムに Kommunismus を吸引する要素があるのか

周知の如く、キリスト教はユダヤ人の伝承に端を発し、ナザレの貧しい大工イエズスによりパレスチナにおいて、かれが紀元30年に十字架にかけられるまでに、その礎を固めた思想である。その後、パウロ他の十二使徒により地中海周辺地区を中心とするユーラシア大陸に伝播したキリスト教は、今日までに重大な分裂を二回おこしている。⁽⁸⁾ 即ち、第一回は1054年に起ったギリシア教会の分離で、これによりバルカン諸国、小アジアおよびロシアは「ギリシア正統派」教会に属するところとなった。指摘するまでもなく、その大部分は現在ロシアを中心とする欧州共産圏を形成している。第二の分裂は、16世紀にルター、カルヴァンらによって起された、いわゆるプロテスタント主義（宗教改革）である。この運動により、北ドイツ、スカンディナヴィア諸国、イギリス、それにオランダ、スイス、フランスの一部がローマ教会の支配から独立し、自らを使徒的教会の真の継承者であると唱えたのである。しかしその後間もなく、プロテスタント教会は「反ローマ教会」と「聖書中心主義」の共通点を残し、無数といえるほど極端に分派していった。

こうして見ると面白いことに、ローマ・カトリックの優勢な南欧諸国、つまりイタリア、スペイン、ポルトガルおよび南フランスにおいて、共産主義の勢力が強く、対して、プロテスタント諸国の北欧では「ソシオ・キャピタリズム」と呼べるような修正資本主義の傾向が顕著である。

(8) J. B. デュロゼル、大岩・岡田訳、カトリックの歴史、白水社・文庫クセジュ、1964年、7版 p.14

これはどうしたことだろう。あるいは、カトリシズムとプロテスタンティズムを対比させ、両者の相違点を明瞭に分別してみると、理解の手がかりが掴めるのではないだろうか：⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

根本教理 〈カ〉 聖書および使徒の教えを、教会が解釈し司教がこれを説く。故に、曲解は許されず、教皇の教えは各教会に一貫する。

〈プ〉 神の言葉である聖書を唯一絶対とし、教会の伝承を否定する。故に、聖書の読み方の相違により、様々な解釈や教派が成立する。

聖職者 〈カ〉 教会の権威のもとで、諸秘跡（特にミサ聖祭）を執行し、キリスト教を宣教する司教・司祭を必要とする。

〈プ〉 「万人司祭主義」の原則から、信者は自由に神聖な場所に近づく権利と、神に賞讃と愛の犠牲をささげる権利を持つ。故に聖職者の存在は絶対条件ではない。

教階制度 〈カ〉 聖パウロの正統後継者であるローマ教皇を頂点とし、以下、司教、司祭、助祭と続く厳然としたヒエラルキーが存在する。

〈プ〉 聖書はキリストの代表者を指定していない。キリストの聖霊は人が神の言葉に絶対服従するとき認識し得るのである。

マリヤ信仰 〈カ〉 「マリヤによってキリストへ」の文句に示される如く、キリストを生んだマリヤの恩恵の協力にあずかる。その他、カトリックでは十二使徒を機能別に信仰するところもある。

〈プ〉 聖書ではマリアを「汝、恵まれた女」と言及しているに過ぎない。信仰にマリアの介入は不要である。

秘蹟 〈カ〉 1274年リヨンの第二次教会会議で、信徒が誕生してから死亡するまでに、洗礼・堅信・聖体（ミサ聖祭）・告解（悔悛）・婚姻・叙階（品級）・終油と七つの秘蹟を定めている。

〈プ〉 聖書の解釈より認められるのは、洗礼と聖体の二つの秘蹟

(9) オランダ改革派教会、乾慶四郎訳、カトリックとプロテスタント、新教出版社、昭37

(10) 会田雄次・谷奉、世界の宗教2、カトリック、淡交社、昭44

のみ。

聖体秘蹟 〈カ〉 ミサの祭壇で、キリストの肉が化したパンを、信者が食べることによって、キリストと合一する。

〈プ〉 神の国が近づいたことを知り、罪の赦しとして、取税人や罪人たちと共にとる食事の継続である。

罪業

〈カ〉 人間は自然的な賜物、すなわち理性（神と神の善意を認識する能力）をもっている。それは墮落により汚され被われてしまいが、失われることはない。そして汚されたものは神の恩恵によってのみ回復される。

〈プ〉 「⁽¹⁾人が心に思い図ることは、幼い時からよこしまである——創世紀8.21」「善を行うものはない、ひとりもない——詩篇14.3」の言葉に示されるごとく、人間は原罪をもって生れる。

救済

〈カ〉 信仰者はその善行の功績により、神の恩恵を受けられる。

〈プ〉 ただ神の恩恵によるのみ。「あなたが救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。——エペソ2.8—9」

神・人交流〈カ〉 キリストの血と肉であるブドウ酒とパンの犠牲、その他奉獻品、および祈りの三種類のメディアを通じ神と交流する。

〈プ〉 ある種のプロテスタント教会では、犠牲に似た行為をおこなうが、原則として、祈りによる単一メディアで交流する。

（なお、ギリシア・ローマに土着の古い宗教では、犠牲・奉獻・祈りに加え、オルギー（神がかり）による四種のメディアで交っていた。）

マルクスは「重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放さ

(1) 日本聖書協会、聖書、1955年改訳

れないように、信用主義は重金主義の基礎から解放され⁽¹²⁾ない。」といている。この譬喩はけだし名言である。マルクスはおそらく重金主義から解放され得ない信用主義に強調を置いたものだろうが、そこに重金主義の集団（国家）単位と信用主義の個人（法人）単位を対比させているところは妙である。

私見ながら、ユダヤ教からプロテスタントに改宗したユダヤ人法律家の父とオランダ人の母の間に生れたカール・マルクスの Kommunismus 思想は優れてカトリック的である。ユダヤ民族の本性がなせるところか知れないが、Kommunismus の思想には、覚者に導かれる盲衆の団結による全体主義が一貫している。

両者共にメシア的見地から、善悪二元論を判断基準として、新秩序の設立を説く点は既に指摘した。この外にもカトリシズムと Kommunismus の相似点が多い。例えば、ローマ法王庁とクレムリンの権力は絶対である。その中央集権体制は秩序（階級）と組織（教区）のもとに確立している。集団は指導者（司教・司祭）と被支配者（信徒）に分れており、指導者は党员（司教）より選ばれる。この介在者の存在により、被支配者（信徒）が直接その意向を表明するすべはない。憲法（聖典）を自由に解釈して、権力と抗争することは許されず、党組織（教会）の意向を介した適用がなされる。各人が幸福になる（救済される）のは労働（善行）の功績によるものである。指導者と被支配者が公式にまみえるのは、特定の場所（赤の広場・教会）における儀式（メーデー・ミサ）のときである。共産世界（神の国）をこの世に建設するために、鋭意、共産化（布教）にはげまなければならない。等々といった具合である。

対して、プロテスタントイズムは個人主義的であり自由資本主義的である。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は両者の相関関係を体系づけた書として有名だが、むしろ改教諸国の資本主義的体質が、それぞれの教派のプロテスタンティズムを受容したと考えられる。何故ならば、ルターの敬虔主義、合理的、哲学的色彩の強いドイツのプロテスタントイズムと、英国の儀式性の強いアングリカニズムと禁欲的ピューリタニズム、アメリカのカルヴァン派形式の濃厚なプロテスタント諸派、禁欲主義のうちに神秘

(12) 齊藤栄三郎、キリスト教の社会思想、同文館、昭44、p.346

主義がしばしば現われるフランスの改革派教会など、国民性や経済環境の相違によって、プロテスタント諸派の勢力分布とその特徴が微妙に異なっているからである。

ともあれ、現在のラテン系南欧諸国に共通して認められる事実は、長期独裁政権の弊害としての代議制民主主義機能のマヒと、一般大衆の内につ積する経済・社会的不満感である。イタリアではムッソリーニのファッショ政治以来、キリスト教民主党が三十年来政権を担当している。スペインでは内戦の憎悪と殺りくの記憶を乗り越えるために、長期フランコ政権に続き、カルロス王政を必要とした。ポルトガルではサラザール・カエターノ独裁を倒すのに必要であった国軍の参政をやむなしとみている。そしてただ今、これら南欧三国を吹き荒れている白い共産主義の嵐は、やはり優れて中央集権的な下剋上の思想を、潜在的に志向している証拠ではあるまいか。

7. カトリシズムはコミュニズムに最終的には屈服するものか

外見的には類似しているが、絶対者を神とするか国家権力とするかで、本質的に対立する両者の関係、および独・伊ファッシズムの相違に関しては、ニーバ⁽¹³⁾、ドウソン⁽¹⁴⁾、ラスキ⁽¹⁵⁾らの研究にゆずり、ここでは一切を割愛する。

端的に結論からいって、次の三理由から、この設問に対する回答はNOとせざるをえないだろう。

第一に、イタリア人は先天的には多神教的国民である⁽¹⁶⁾。キリスト教渡来以前のローマは、他の地中海沿岸諸国と同様、实际的功利的な多神信仰であった。戦になるとヤヌス神の加勢を求め、雷神ユピテルに雨乞いし、ユノーに田畑・果樹・子供の豊饒多産を祈り、その他、種まきにサトゥルヌス、快楽にヘラクレス、商業にメリクリウス、学問にミネルヴァといった具合に機能神を使

(13) R. Niebuhr, *The Children of Light and the Children of Darkness*

(14) C. Dawson, *Religion and the Modern State*

(15) H. J. Laski, *Reflections on the Revolution of Our Time*

(16) I. モンタネツリ, 藤沢道郎, *ローマの歴史*, 中央公論社, 昭51, p. 90-1.

い分けていた。そして、この多神的メンタリティが、北欧プロテスタント諸国の事情とは一風異なった、マリヤ信仰や使徒信仰が特に中・南部イタリアで盛んなことの要因となっているのである。

元来、生活に安易な環境が多神信仰を生む傾向があり、その特徴はある機能神の効力が薄れると、新規に神を鑄造ないし輸入して、そちらへ信仰対象を切り換える性向である。現にイタリアの歴史は、暗殺、幽閉、叛逆などの手段による「首のすげ替え」で局面を打開するケースを豊富に提示している。

第二に、ローマ・カトリックの生命力は、したたかな柔軟性をもって、あらゆる時代のあらゆる支配者のもとで生き続けてきた。逆の意味で、これは文字通りカトリックの「普遍」性が、時代を超えて、人々の魂に作用し、そして希求されてきたことにほかならない。

歴史的に周知のイベントだけを集録してみても、まず紀元一世紀のネロの虐殺を代表とする迫害に始まり、コンスタンティヌスにより勅令を受けてからも、四世紀の蛮族の侵入、ヨハネ十二世当時の教会の頹廃、十四世紀人文主義の台頭と教会財政の難局、プロテスタントとの対立、十八世紀の近代科学による威嚇、十九世紀に入って国・教分離、デカルトからマルクスに連なる哲学の挑戦、世界大戦とファシズムの圧力、等々とカトリックの歴史はまさに適応の歴史である。

このように不滅の生命力をもってカトリックが歴史を通貫して存在してきた事実は、人間が「宗教」を必要とし、そしてそれはユングの見解⁽¹⁷⁾にある如く、人間の意識裡の問題ではなく、意識構造の最底部にある「集団的無意識」の領域にかかわる問題だからであろう。共産主義のソ連において、結局、宗教を否定し得ず、結婚式の儀式をより荘厳におこなう風潮が最近さかんになってきたそうである。

第三に、現代社会では純粋な意味におけるマルクス思想革命は起りえない。フランス共産党の理論家ジャン・カナパがいみじくも言明したように、「1968年、社会主義への民主的な道を定めたシャンピニー宣言の発表以来、プロレタ

(17) スピックス、久保田圭伍訳、人間心理と宗教、大明堂、昭46、2刷、p. 61-2

リア独裁の概念は、その必要がなくなったから、使用していない。国民の80%がサラリーマンの現在、プロレタリア独裁は不用である。われわれは革命時代のロシアに生きているのでなく、ハンガリーやブルガリアの党でもない。1976年のフランスには新しいフォルムが必要だ。」

かつて、王侯貴族や少数の特権階級を打倒することは、大多数の幸福を約束した。しかし今日では、そうした連中もサラリーマンも大なり小なり同一基盤の上に乗っているのである。そうなれば、革命にかわって改善があるのみで、白い共産主義の理論とならざるをえない。そしてそれは、むしろ社会主義ないし修正資本主義の色彩に近いものになる。